「おふでさき」四号53～61 「いんねん」、「から、にほん」

『おふでさき註釈』には、昭和3年版から現行版まで53の「註」はありません。これは53，54を通して読むと「因縁に隔てはない」という意味になるのですが、この解釈だと、「悪しき事をすれば悪しき理が添うて現れる。『世界にもどんないんねんもある。善きいんねんもあれば、悪いいんねんもある。（明治28・7・22）』」という『天理教教典(改訂版)』(P71)の教理と矛盾してしまうからです。

この「いんねん」観は明治45年に出版された『三教会同と天理教』では、「緑児にして道路に捨てられ、又貧賤の家に生るゝ如きも、此の前生の因縁」(P36)とあるため、「おふでさき」解釈としては昭和3年版からその文意通りに読むことが憚られたのです。

『天理教教典』は、三原典に基づいて編述されたことになっていますが、実際は『教典』に合わない「おふでさき」についてはその解釈の方を変えてしまっているのです。改訂版で引用されている「おさしづ」(明治28・7・22)は改訂前にはなかったもので、「三原典に基づいて編述された」という建前に合わせるために挿入されたのでしょうか。

53．しかときけよろつの事をみなをしへ
　どこにへだてわさらにないぞや
54．どのよふなところの人がでゝきても
　みないんねんのものであるから

53.54のお歌では、人間である限り、どんなところの人が出てきても、元始まりに親神によって作られたといういんねんからするならば、みな、**区別・差別がない**のだ、と仰せられています。（『おふでさき拝読』P138.矢持辰三.1994）

本書は　おふでさき　みかぐらうた及びおさしづに基き　天理教教会本部に於て編述したもので　天理教教規の定めるところにより　これを天理教教典として裁定する　／　昭和二十四年十月二十六日
真柱中山正善
（『天理教教典』冒頭）

五一、肥と言うても、ぬかや土や灰が利くのではなくて、真心から親神にもたれるその誠が親神に通じてりやくとして現れるのである。

五四、何処の国からも多くの人がぢばを慕うて帰って来る事になるが、しかし、それ等は何れも親神の子供で、真実親子のいんねんから帰参するものであるから、決して偶然と思うてはならぬ。

53の「註」はない

『おふでさき註釈』P60

【現行版註釈】五四、何処の国からも多くの人がぢばを慕うて帰って来る事になるが、しかし、それ等は何れも親神の子供で、真実親子のいんねんから帰参するものであるから、決して偶然と思うてはならぬ。

「いんねん」には隔てがあることを説く『三教会同と天理教』（明治45〈1912〉年）、『天理教教典ー改訂版』(昭和59〈1984〉年)

（ロ）教理の要領

我が天理教の教理は教典及び御神楽歌の上に其の大綱を示されてありますが、なほ其の要領に就いて教祖の教へられましたる所を申して見ますると、我々人間の霊魂と云ふものは神様の分霊を与へられたのであって我が物であり、又我が身体は神様から借り受けて居るものであるのであります。従来我々はこの身体を我が物と思うて居つたのであります。然るに教祖は此の身体を我が物でもなく、父母の物でもなく、実に神様のものであつて我々人間は神様からこれを拝借して居るのであると説かれたので、これを本教にては「貨物借物の理」と申して居ります。即ち神様から云ふ時は貨物、人間から云ふ時は借物であります。而して我が身体は神様の直接の御支配に属して居る借物である証拠は、我が心は我が心のまゝになりますけれども、身体の方は我が心のまゝにはなりませぬ。生死疾痛皆神の御心に従はねばならぬといふので分ります。されば人間は神の御守護を受けずしては存在する事はむつかしいのでありますから、常に神を信じて神と一致するやうな心と行とを持たねばむらぬのであります。然るに人間は神より与へられたる心の自由によつて悪しき方に心をつかふが故に、多くの人間は何等かの疾病に罹り、禍害を受け、短命に終るのであります。而して其の悪しき心づかひと云ふことは、教祖は之を一つには前生の因縁二つには現世の因縁と説かれたので、其の第一の前生の因縁と云ふのは前生に於いて心に埃を積んで置いたのが原因となつて、之を現世へ待ち越して来たので、去年手入れの悪しかつた種子は、今年の発育が好くないと云ふのと同じ道理で生れながらにして盲目であつたり、跛（ちんば）であったり、愚鈍であったりなどの遺伝よりするものは、皆此の理に由るものであると教へられて居ります。又緑児にして道路に捨てられ、又**貧賤の家に生るゝ如きも、此の前生の因縁**です。而して第二の現世の因縁と云ふのは、十五才以来物心を知つてからの我が心づかひと行ひとより生ずる罪科であります。而して此等の罪科を教祖は埃と云ひ、之を八ツに分けて説かれました。（『三教会同と天理教』P34）

きゝたくバたつねくるならゆてきかそ　よろづいさいのもとのいんねん　一　6

人間には陽気ぐらしをさせたいという親神の思いが込められている。これが、人間の元のいんねんである。

しかるに、人間は、心一つは我の理と許されて生活(くら)すうちに、善(よ)き種子(たね)もまけば、悪しき種子(たね)もまいて来た。善き事をすれば善き理が添うて現れ、**悪しき事をすれば悪しき理が添うて現れる**。

世界にもどんないんねんもある。善きいんねんもあれば、**悪いいんねん**もある。　（明治28・7・22）

およそ、いかなる種子(たね)も、まいてすぐ芽生(めば)えるものではない。いんねんも、一代の通り来りの理を見せられることもあれば、過去幾代(いくだい)の心の理を見せられることもある。己(おのれ)一代の通り来りによるいんねんならば、静かに思い返せば、思案もつく。前生(ぜんしょう)いんねんは、先ず自分の過去を眺(なが)め、更には先祖を振り返り、心にあたるところを尋ねて行くならば、自分のいんねんを悟ることが出来る。これがいんねんの自覚である。(現行版『天理教教典』P70)

教祖存命時代には前生の悪因縁を切るための信仰はなかった

2021.03P18

明治9年に16歳で入信し、明治20年頃から布教に歩いた板倉槌三郎は、大正11年に自分が布教したころは「因縁を切て頂けといふ様なことは一寸も言はなかった」という文を残しています。
『おさしづ』の中には1390例の「いんねん」が出てきます。普通「おさしづ」の解説書は、天理教史に関連した内容を取り上げるので、「いんねん」はあまり出てきませんが、全編を順に読んでいくと「いんねん」がうんざりするほど数多く出てきます。板倉はそれを「御本席がお立ちになってから『身上伺ひ』をするのに対して、これは『因縁』であるとか何とか仰せられたまでであった」と語っています。
「おふでさき」と「おさしづ」の「いんねん」を読み比べると、本席は教祖の教えを本当は理解していなかったのではないかという疑問に取りつかれます。ともあれ、本席が明治40年に亡くなって、明治45年に、『三教会同と天理教』によって「因縁」教理が「天理教」の教理としてまとめられました。

因縁」の教理について、1876（明治9）年に入信した河内恩智村（現在、八尾市）の板倉槌三郎(1860生)は、『道乃友』1922（大正11）年二月号に掲載された「私の青年時代に於ける信仰(二)」のなかで、当時の信心を回顧しながら次のように述べている。

私は二十七の年から、郡山の方へ出て布教さして貰つたのであるが、その時分の私としても、お助けをして因縁を切って貰ふとか講社を拵らへるとかいふ様な考えは毛頭もない。（中略）『因縁』といふことも教祖の時分には仰しやらなかった。それで私等の布教に出かけた頃にでも、先も言ふ様に、人様を助けて因縁を切て頂けといふ様なことは一寸も言はなかった。／　これは、御本席がお立ちになってから『身上伺ひ』をするのに対して、これは『因縁』であるとか何とか仰せられたまでであった。

右の文で板倉槌三郎は、明治10年代には、前生の悪因縁を切るために信心したり、布教したりすることはなかったと言っているのである。（『天理教の史的研究』P290. 大谷渡著. 東方出版. 1996）

江戸時代に説かれていた「いんねん」観を否定する教祖の「いんねん」

江戸時代、一般に過去・現在・未来の三世にわたる善因善果・悪因悪果の因果応報が信じられており、それが現世の差別・圧迫を因果業報として正当化されていました。それを教祖は「人間である限り、どんなところの人が出てきても、元始まりに親神によって作られたといういんねんからするならば、みな、区別・差別がない」(『おふでさき拝読』P138)と四号53, 54で云われたのです。この教えは分かりやすく、幕末から明治期に天理教が伸びる要因の一つと思われます。しかし、一般社会の常識と異なるこれは、明治41年に公認され、一般社会に受け入れられていく過程で、変質していきます。

「乞食・非人」は前世の悪因によるものとする江戸時代の真宗教理

真宗は、日本の仏教の歴史の中で、貴族仏教から民衆仏教へと展開していくなかで生れた。社会的・経済的に下位におさえつけられ、さげすまれていた民衆の救い、成仏が明らかにされていくなかから、真宗は生れた。そして、民衆の精神を支え、民衆の生活に光をなげかけていったのが真宗の教えであったのであろう。

しかしその真宗も、徳川幕藩体制の中で、民衆を裏切る体制になっていった。寛文5年（1665）の「諸宗寺院法度」の制定、寛文11年の「宗門改之儀ニ付御代官達」、元禄5年（1692）の「末寺帳の作成」などをとおして、真宗教団は幕藩体制の支配機構の中に組み入れられていった。安達五男は、そういったなかで、「えた頭寺」制を中心とする「部落寺院制」が確立されていったという。すなわち、「京都の本願寺を総本寺とするいわゆる真宗の寺院体系と京都の金福寺、万宣寺、摂津富田の本照寺、播磨の源正寺など『えた頭寺』の下寺に編成されていく被差別部落寺院の別の体系」が制度的に確立されていったという。そして、**「被差別部落の寺院、道場は従来の真宗寺院の本寺や中本寺の下寺から外され、きり捨てられていった。」**という。

被差別部落寺院は、天明3年（1783）まで、自剃刀さえも許されなかった。また、御絵像などの御礼金は、一般末寺より五割増で徴収された。したがって部落門徒は、「自分の手次の寺院が被むる差別と、それからまたその寺院からの一般門徒と違った五割増徴収というような、そういうかたちでの差別と、いわば二重差別というものを構造的に背負わされ」ていた、と柏原祐泉は述べている。

また、**当時の真宗の教えは、差別・圧迫を因果業報として正当化し、死後の救い、来世の往生における平等が強調されていった**ように思われる。例えば妙音院了祥は次のように述べている。

> 「今日**乞食非人となりたるをみれば、過去の世には善根をつまず、悪因のみつたりしことのしられ**、今生富貴の人をみれば、前世に善因をなせしことのしらるるなり。」
>
> 「未来の往生には高下もなく、貧福もなく、乞食も念仏すれば浄土に生れ、天子も信心なくば三途をまぬがれたまはず。」

「乞食・非人」は前世の悪因によるものであるとされ、したがって、「乞食・非人」が現世において「いやしきもの」として差別されることは正当化されていく。しかし未来の往生は、信心をえて念仏すれば、貧富・貴賤にかかわりなく浄土に生れるとする。

往生における平等が強調されているにもかかわらず、現実生活におけるきびしい非人間的な差別は正当化されている。したがって、きびしい差別・圧迫のなかにあった人々も、その差別・圧迫を甘受し、忍従していかざるをえなかった。そういう形で真宗は、幕藩体制における身分支配を正当化し、身分制度に奉仕していったといえよう。（『部落差別と真宗の課題』P6. 近藤祐昭. 永田文昌堂. 1983）

因果応報が現世のみで完結するのではなく、過去・現在・未来の三世にわたる

因果応報の矛盾

1612（慶長17）年ごろ、新しい文芸スタイル仮名草子の第一作として登場した「恨の介」（日本古典文学大系『仮名草子集』所収）の主人公は、「思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれ」との嘆きの言葉を吐いている。これにつづく「薄雪物語」（日本古典文学全集『仮名草子集浮世草子集』所収）でも「げにや思ふことかなはねばこそ、うき世なれ」と主人公が恋文のなかで述懐する。それから約50年を経た後、浮世を主題化した最初の仮名草子として有名な「浮世物語」の序文に、やはり

思ふ事叶はねばこそ浮世なれといふ歌も侍べり、万につけて心に叶はず、ままにならねばこそ浮世とは言ふめれ

とあって、「思ふ事叶はぬ」という言葉が、仮名草子の時代を象徴するものであったことが読みとれる。それでは「思ふ事叶はぬ」とは、いったいどのようなことを指しているのであろうか。

仮名草子の出現と時を同じくして、仮名で書かれた教訓書の類が出始める。1619（元和5）年までに成立したとされる教訓書『心学五倫書』（日本思想大系『藤原惺窩　林羅山』所収）は、この時期の人々が何を「叶はぬ」ことと考えていたかを知らせてくれる。その最後の第二十段は、

悪人なれども、一代富貴にさかえたるものあり、善人なれ共貧しきものあり

と、**善因善果・悪因悪果であるべき因果応報の原理と矛盾する現実のありさまを問題にしている**。たんに己れの欲望が達成されないということではなく、**因果応報が正しく実現していないことが、「思ふ事叶はぬ」ということ**の中身ではなかろうか。ここではこの因果応報の矛盾したありかたは、先祖の善悪が子孫に報いるという積善余慶・積悪余殃の考えかたで説明され、**因果応報が現世のみで完結するのではなく、過去・現在・未来の三世にわたるものであることが説かれている**。因果応報の原理を信じて疑わない思想状況が大前提となってのことである。

－中略－

これから見ていくように、このような思惟はけっして『心学五倫書』の独占するところではなく、人々の一般的思惟であった。信長が彼を拝さない者は「現世に於ても来世に於ても亡ふる」（フロイス「日本史」）といい、秀吉が刀狩令で「今生之儀は申すに及ばず、来世までも百姓たすかる」と述べ、家康が「厭離穢土欣求浄土」の旗を掲げ、「現世安穏後生善処」をスローガンとしたのは、この時期、後生の問題が人々の重要な関心として存在し、それを論理的に支える仏教が、武力や統制だけでは壊滅しえないことを権力者たちが認識していたからにほかならない。（「近世民衆仏教の形成」大桑斉.『日本の近世①世界史の中の近世』.１９９１・中央公論社）

現在の「おふでさき」解釈　**①分かりづらい『学習する』解釈**　**②『通訳』は53と54を分ける**

冒頭で引用した『おふでさき拝読』が53，54を人間には区別･差別がないと明確に述べていたのに対して、『おふでさきを学習する』は「隔てをしているのではない。皆いんねんによって、でてくるのである」と解釈しています。『拝読』の明確さに比べて、『学習する』は分かりづらい。それは「人間は因縁によって違いがある」という『天理教教典』の趣旨との整合性を気にして解釈するからです。また『おふでさき通訳』は53の「へだてわさらにない」を「みなをしへ」についてのことであると限定し、「みないんねんのもの」に掛からないよう、つまり『教典』との整合性を保てるようにしています。

しかときけよろつの事をみなをしへ　どこにへだてわさらにないぞや　四　53
どのよふなところの人がでゝきても　みないんねんのものであるから　四　54

といわれる。ここで「へだてわさらにない」と仰せになるのは、人間にとって、隔てがあるようにみえるので、そうでないことをお断りになったのである。逆にいえば、神がたすけの準備を進めるにあたり、**隔てがあるような条件を整えていく、そういう段取りをするということ**である。／　身の障りになれば、なんで私が？　なんであの人が？　まわりにいくらでも人がいるのに―これが人間の見方である。隔てを感じるのである。それは**隔てをしているのではない。皆いんねんによって、でてくるのである**と。

立教のとき、「みきを神のやしろに貰い受けたい」という親神の思召に、夫善兵衛様は「子供も沢山御座いますし、村の役なども勤めて忙しい家で御座いますので、お受けは出来ません。他様に立派な家も沢山御座いますから、どうかその方へお越し願います」と願われた。／　もちろんこの出来事は、次の55(※にんけんをはじめだしたるやしきなり　そのいんねんであまくだりたで)のおうたで明らかなように、人間元初まりのいんねんに基づいて生起してきたものである。こうした状況は、いんねんの位相レベルこそ違え、とくに身の障りとして、私たちに現れてくる。

そこに「神の用向き」という、いんねんある人たちが引き寄せられることになる。それを「よろづいんねんみなついてくる」(60)といわれ、続いて61で「いんねんもをふくの人である」(※61．いんねんもをふくの人であるからに　とこにへだてハあるとをもうな)、すなわち、いんねんによってついてくる人にはさまざまある、といわれた。そして、／　このよふを初た神の事ならば　せかい一れつみなわがこなり　四　62　／と、人間は皆可愛い、たすけたいわが子であり、隔てをするわけがないではないかと、さらに念をおされた。(**『おふでさきを学習する』**P198. 安井幹夫. 私家版. 2016)

※53-54「しっかりと聞いておけ。〈つとめに限らず〉よろづの事を皆教える。それには隔ては少しもない。どんな所の人が〈この屋敷に〉出て来ても、皆いんねんの者であるから〈皆同じように教える〉。」(**『おふでさき通訳』**P144. 芹沢茂. 1981. 道友社)

③『講義』も53と54を分けて解釈する

『講義』は一首ごとに解釈を付けるという体裁になっているので、53の「へだてわさらにない」は「何も彼もみんな人間達に教えて」と解釈しています。『通訳』の解釈はこれに倣ったものでしょう。

54の「いんねん」は「元のいんねん」としているのですが、後の方に「三代、五代前の悪いんねんをたんのうによって切ってもらったならば」というのが出てきます。「悪いんねん」の説明は、『天理教教典』から逸脱しないためでもあり、また上田氏自身はコチラを信じているのだと思います。引用の「おふでさき」は下の句で「いんねんつける事ハいかんで」とあり、悪いんねんのような使い方はするなという意でしょう。それなのに悪いんねんの根拠のように使っています。

※53.「しかときけ」というのは、しっかりと聞き分けよという事です。「よろつの事」というのは、すべての事、一切万事、何も彼もみんな人間達に教えて。「どこにへだてわさらにないぞや」というのは、誰彼の差別区別というような事はしないという事です。高山も谷底も、また遠い近いの隔てもない。一列は皆親神の可愛いい子供であるから、すべての人間に何も彼もみんな教えるのである、と仰せになっているのです。（『おふでさき講義』P117. 上田嘉成. 1973. 道友社）

※54.「どのよふなところの人」というのは、どんな高い山の上から来ても、また谷底から出て来ても、はたまた、思いがけない遠い所から来ても。「みないんねんのものであるから」このいんねんは、やはり元のいんねんです。おふでさきの中にあるいんねんは、九分通り元のいんねんという意味です。元のいんねんと申しますと、元初まりに元のぢばにおいて陽気ぐらしをさせようと思って、親神様が、親神様の可愛いい子供としておはじめ下されたというのが、人間の持っている元々のいんねんです。この事をおふでさきにおいては、繰返し繰返し仰せ下されているのでありまして、よく一般に対話をしたり、またお話をする時でも、このいんねんというのを、悪いんねんのように専ら使う人もありますけれど、おふでさきから申しますと、そういう使い方は間違いです。これは、前にも申し上げたと思うのですけれど、陽気ぐらしの元のいんねんというようにお使いになっているのが九分通りでありまして、はっきり悪いんねんの意味でお使いになっているのは、ただ一度だけです。

それは、／　このよふハあくしまじりであるからに　**いんねんつける事ハいかんで**　（第一号　62）／というのが一度だけです。その他は元初まりの陽気ぐらしのいんねんという意味でお使い下さっているのです。ですから、根本の大きいいんねんは陽気ぐらしだということを、しっかり心に治めさせて頂くことが肝心です。三代、五代前の悪いんねんは、たんのうによって切ってもらうのですが、いつまでも、悪いんねんを切ったか、切らんかぐらいのところで、まごまごしているのは間違いでありまして、**三代、五代前の悪いんねんをたんのうによって切ってもらったならば、今度は、陽気づとめによって一直線に、元初まりの陽気ぐらしという元のいんねんまで帰ることが肝心です**。／ですから、この場合においては「みないんねんのもの」というのは、おぢばでおはじめ頂いた、親神の可愛いい子供だという意味、親子のいんねんのものということです。（『おふでさき講義』P117）

前生因縁（悪いんねん）を信じる天理教徒－愛町初代の伝記

天理教の中で特出する教会として何かと話題になる愛町分教会の初代会長関根豊松氏の伝記『因縁に勝つ』には「前生因縁」という小見出しがあって、自分の前生を悟った時に、それまで悩んでいた目の痛みがすっきり直ったということが書かれています。『天理教教典.改訂版』に「前生いんねんは、先ず自分の過去を眺め、更には先祖を振り返り、心にあたるところを尋ねて行くならば、自分のいんねんを悟ることが出来る。これがいんねんの自覚である。」とあることの具体的事例のお手本のようです。天理教ではいまだにこの信仰が生きているのです。

関根豊松 1881(M14)年-1969(S44)年(ウィキペディアより)
天理教の史上有数のカリスマ性があったとされる人物。天理教の内部の天理教愛町分教会という組織を設立して、この愛町分教会は天理教の内部でも最大級の規模となる。天理教には分教会の上に大教会を置くという構成なのだが、愛町分教会の規模は大教会を凌ぐほどであった。1987年には天理教の教祖である中山みきが没してからの100年祭が天理市の本部で開催されることになり、愛町分教会からは10万人が団体で参加するという計画にしていたのだが、13万人が団体で参拝した。

前生因縁

いつものようにお助けに飛び回って、奇跡的なご守護を頂いていた会長様であったが、二十数歳頃のある時、どうしたことか目が非常に痛んでしようがない。痛みは幾日も続いた。どのように神様にお願いしても全く良くならない。道一条になる前から、“お助け名人”といわれて人の身上はまたたく間に助ける会長様であったので、信者たちは「豊さんは誰でもどんな病でもすぐに助けるが、たかが自分の目の痛み一つ直せないのか」というのだった。あれやこれや思案したがさっぱり判らない。

今生において、もはや考えるところはなかった。それでは自分の前生はどんな道を通ってきたのかが、大きな問題となってきた。関根家の先祖は果たしてどんな人々で、どういう道を通ったか知りたかった。いろいろと心当たりを訪ね歩いたが全く分からなかった。

とある遠い親戚に、八十才余のおばあさんがいるのを耳にした。／　そのおばあさんが語るには、

「関根家の先祖は三河の人で、財産家であったが、本人は財産をもって親や妻子を置いたまま、東京に出てしまい、そして高利貸しを始めた。金が戻らないと、病いで寝ている人の布団をもはぎ取っていくというほどであったから、この高利貸は後に講談にも歌われた位だった。また妾の何人かを持って、贅沢をしていたが、やがて盲目になって死んだ」という。それを聞いて会長様は　／「これだ！この人が俺の前生だ」と思った。

「だからこそ、今生は生まれながらにして両親に捨てられたのだ。前生に親や妻子を捨てたのだから、今生はその通り返しなのだ。よし、こんな因縁の私なら一生地ベタへ寝てお道をやろう。いや一生では、この因縁は切れない。三代位い本気になってお道を通らなければ……」それで神様に　／「もし、私がその人の魂の持ち主なら、これから心して通らなければいけない。だから、私の前生がその人であるかどうか教えて頂きたい。もしそうなら、豊松は三代お道をする覚悟でございます。どうか、一時(いっとき)のお願いでお示し頂きたい」とお願いした。ところが、今までどうしても取れなかった目の痛みが、うそのようにすっきりと直った。／　その後、母を上座にすえて、両手をつき自分の前生のお詫びをした、とのことである。（『因縁に勝つ』P32.1967.愛町分教会.関根清和編）

ー「空っぽ」の天理教教理と実践ー
宗教二世問題を抱えてしまった里子

今年4月2日の毎日新聞に「信仰を強制され空っぽの私」というタイトルで、天理教教会に里子として預けられ、里子の期間が終了したのちも、教団の教育機関などで教育を受け、教会後継者と結婚した人の話が出ています。

教会に里子として入ってから、「おまえたちは『いんねん』がわるい」といわれ、幸せになるためには、天理教の教理を学ばなければいけないという教育を受け、そして、里子の時から20年近く天理教の中で暮らした挙句、うつ病になり教団を離れ、現在は教外者と結婚していることが書かれています。

この人を里子として預かった方は、当時教会長で現在は80代とのことです。たぶん、前生因縁の教理を本気で信じていたので、それを説いたのでしょう。

今回の里子の問題の本質は、教祖が世俗的な「いんねん」観を否定したのに、教団はそれに反して世俗的なそれに戻してしまった、それを信じている教会長が里子にそれを説き、素直に言われるままに動いた里子は、十数年後に自分が空っぽだったことに気づいた。それはすなわち、現行の天理教教理というものの空虚さを示しているのではないでしょうか。

「おまえたちは『いんねん』がわるい」。教会長はそう話した。天理教では良い行いをすれば良い結果が、悪い行いをすれば悪い結果表れることを「いんねん」と呼び、来世に受け継がれると教えられる。／「前世の行いや母の育て方が悪かったから、神様のお引き寄せで教会に連れてこられた。幸せになるためには教えを学ばなければいけないよ」

信仰を強制され 空っぽの私

「布教しないと不幸になる」

13歳で天理分教会里子の女性

転居・離婚・棄教…心の傷なお

2024.04.02毎日新聞

声上げられる仕組みが必要

井上寿美・大阪大谷大特任教授（保育学）の話　里親の自宅で養育を受ける里親委託児（里子）は、宗教の強要などを嫌だと感じても言いづらい。居場所を失ってしまう不安や、里親に面と向かって言う難しさもあるだろう。子どもが声を上げられる仕組みが必要だ。自分の意思をうまく伝えられない子どもの代わりに公的な第三者が代弁する「アドボカシー」や、同じ境遇の子ども同士で語り合える集まりなど、複数の仕組みを作る必要がある。

天理教と里親活動

天理教の里親活動は、教会や信者家庭が孤児らを預かって育ててきたことに始まる。教祖・中山みきの「人の子を預かって育ててやる程の大きなたすけはない」などの言葉をよりどころとしている。

1948年に施行された児童福祉法で里親が制度化されてからは、信者らが自発的に、または地域の要望を受ける形で取り組んできた。天理教里親連盟は81年に発足した天理教里親会を母体に、83年に現在の名称へ改称。会員の研修会や里親相談室（里親サロン）を開催するなどし、里親の資質向上を目指して活動している。

■「ブギウギ」視聴率、関東15.9%

3月30日に放送を終了したNHK連続テレビ小説「ブギウギ」（全126回）の期間平均世帯視聴率は関東地区で15.9%、関西地区で14.4%だったことが1日、ビデオリサーチの調査（速報値）で分かった。主人公のモデルになった歌手、俳優の笠置シヅ子は香川県出身で、岡山・香川地区は13.6%だった。

■Sexy Zoneが改名

天理教は此の毎日新聞の記事について、天理教布教部社会福祉課/課長、天理教里親連盟/委員長の連名で「天理教里親連盟会員の皆様へ」という文書を作成しています。

この文書のテーマは「宗教の強要」です。天理教の里親はほとんどが教会施設で養育に当たっています。天理教の教会は宗教施設と生活スペースが一体化しているところが多いので、そこで「宗教の強要をしない－宗教を意識させないで暮らす」ことは難しい。

また、この里子が言われたという「『いんねん』がわるい」という教理についてこの文書は触れていません。『天理教教典』に書かれている教理についてとやかく言う立場にないということなのかもしれませんが、教団として対応すべき問題でしょう。

信仰を強制され 空っぽの私

「布教しないと不幸になる」

13歳の時、天理教の分教会に「里子」として預けられた女性が、毎日新聞の取材に「里親に信仰を強制された」と訴えた。天理教は里親活動に熱心に取り組むことで知られるが、里子に信仰の自由はあるのだろうか。「私は空っぽだった」という女性の声に耳を傾けてみたい。

13歳で天理分教会里子の女性

しおり(35)＝仮名＝は九州の地方都市で生まれた。小学生の頃に両親が離婚し、母と姉、妹との4人暮らしだった。中学1年の時、児童相談所(児相)は母の養育能力がないと判断し、姉妹3人は児童養護施設に預けられた。

「面談してほしい人がいる」。入所後間もなく、施設の職員から言われた。天理教の分教会を営む教会長が、3人を里子として迎えたいという意向だった。姉は中学3年で、妹は小学5年だった。「私たちには(里子に)行くとか、行かないとか決める権利はなかった。児相や施設と教会長夫婦の間で話が進んだ」としおりは振り返る。

里親は児童福祉法に基づき、さまざまな事情で実親に育てられない子どもを家庭で預かり、養育する制度だ。養子縁組とは異なり、里親と里子に法的な親子関係はない。

「いつか引き取りにくるから」。母は3人にそう説明した。しおりは天理教という言葉自体を聞くのが初めてだったが、ちゃんとした所に行けて安心して寝られるから大丈夫かな、と当時は思っていた。しかし、現実は過酷だった。

教会長夫婦の自宅は分教会を兼ねている。姉妹3人は初日から、自宅にある「神殿」で参拝の手順を教え込まれた。毎朝、午前5時ごろに起こされて「朝づとめ」と呼ばれる礼拝に参加した。拍子木や太鼓に合わせて歌を唱え、手を振って祈りをささげた。経典を読み、教会長の講話を聞いてから登校。帰宅すると「夕づとめ」があった。

姉妹3人が寝起きしたのは物置のような狭い部屋。勉強机もエアコンもなかった。住み込みの男性から食事の準備や片付け、掃除などを厳しくしつけられた。

「おまえたちは『いんねん』が悪い」。教会長はそう話した。天理教では良い行いをすれば良い結果が、悪い行いをすれば悪い結果が表れることを「いんねん」と呼び、来世に受け継がれると教えられる。

「前世の行いや母の育て方が悪かったから、神様のお引き寄せで教会に連れてこられた。幸せになるためには教えを学ばなければいけないよ」

住み込みの男性は教会長の不在時には酒に酔い、暴力を振るったり、体を触ったりすることがあったという。それでもじっと耐えた。「教会の一員にならないと追い出されるんじゃないか。神様に罰を与えられるんじゃないかと怖かった」としおりは言う。

転居、離婚、棄教…心の傷なお

転機が訪れたのは25歳の時だ。信者の男性に結婚を申し込まれた。その男性は関西にある分教会の、教会長の息子。「どこか別の場所へ行きたい」と思っていたしおりは受け入れた。

だが、嫁ぎ先でも里子としての出自がしおりを苦しめた。「お母さんみたいにならないためにしっかりやってね」。教会の関係者からはそう言われ続けた。

4年ほど家庭生活を送った末に、心が折れた。「やっぱり幸せになれないんだ」。しおりはうつ病を患い、離婚した。逃げるように天理教からも離れた。

10年以上を費やした信仰を失うと、しおりには何も残っていなかった。「私の人生は何だったんだろう」。一時、友人の家に泊めてもらったが、履歴書に書けることがなく、アルバイトにも足が向かなかった。さまよう日々が続いた。

そんな時、SNS（ネット交流サービス）で知り合ったのが今の夫だ。着の身着のままで転がり込むように家に来たしおりを、夫は受け入れてくれた。半年後、2人は結婚した。

夫との出会いは、しおりにとって「奇跡みたい」なことだ。それでも、幼い頃からの信仰の影響や、心の傷が癒えたわけではない。今も眠れなかったり、夢に昔の記憶が出てきたりして自己嫌悪にさいなまれる。

「私にもっと普通の人生があったなら」としおりは空想する。友達と旅行したり、ショッピングをしたり、恋愛したりしたかったな――。取り戻せない時間の重みが、心にのしかかる。

当時、教会長だった80代の男性は毎日新聞の取材に「おつとめ（礼拝）をする時に一緒にするか、とは言ったかもしれないが、信仰を強制したことはない。あくまでも『人助け』という教えに基づいて里親をしている」と話した。

一方、362世帯で768人の子どもを養育している「天理教里親連盟」は「子どもには信仰の自由があるので半ば強制になっていないか、里親自身の信仰を押し付けていないか、十分気を配っている。しかし、子どもが本心を言えないでいることもあると思う。子どもの心を聴くことができるよう養育力の向上を目指し研修を重ねている」などと文書で回答した。

【藤田剛、写真も】

里親は通常、子どもが18歳になるまでが対象だ。しかし、教会長の干渉は続いた。しおりは高校卒業後、天理教本部（奈良県天理市）で教えを学ぶ「専修科」へ行くように言われた。寮に入り、経典を読んだり、おつとめに使う鳴り物（楽器）の練習をしたりして2年間すごした。周囲は他の教会長の息子や娘たちばかりで、里子であるしおりは白い目で見られた。

さらに専門的な課程で2年間すごした後、しおりは関西にある教団施設で布教の実践的な訓練を始めた。街頭で声を張り上げたり、民家の玄関で土下座したりして布教に励んだ。「やりたくないけど、やらなきゃだめなんだ。そうしないと私は絶対、不幸になってしまう」。そんな強迫観念にとりつかれていた。

立教187(※2024)年４月25日／**天理教里親連盟会員の皆様へ**／天理教布教部社会福祉課/課長　橋本武長　天理教里親連盟/委員長　梅原啓次

拝啓　／　皆様方には、教祖140年祭に向かう三年千日活動の上に、日々勇んでおつとめのことと存じます。また、日々は子どもの養育の上にご尽力いただいておりますこと、心よりお労い申し上げます。

さて、毎日新聞（4月2日発刊）に掲載された天理教里親による宗教強要問題に関する記事について皆様方には大変ご心配をおかけいたしていることと存じます。この件につきまして、布教部社会福祉課および天理教里親連盟としての見解をお伝えいたします。

掲載されました記事でご本人（元里子さん）がお話しなされたことに対して、当事者（里親）に天理教里親連盟として話を聞かせていただきました。その里親さんは20年前から里親をしていますが、その間、児童相談所から「**宗教の強要**はしないでください」と言われてきましたので、当然強要したことはなく、児童相談所の数回に及ぶ里子への聞き取りからも強要した事実はありませんでした。その里親さんは、「毎日新聞の取材を受けた時、記者の対応が穏やかで、こちらの思いも理解するような話し方だったので、まさかこのような記事が出るとは思わなかった」と言われていました。／　今回の記事においては、毎日新聞の記者からの取材を受けた里親さんが語られたことがほとんど掲載されておらず、偏った内容になっていることは、大変残念に思います。

そのような中、全国のお道の里親さん方におかれましては、地域の方々や関係者の方々からもさまざまなご意見をいただいていることと思います。また、記事を読んで非常に心配されておられることと思います。／　長年、お道の里親は、教祖の御教えを拠り所として子どもたちのおたすけとの思いで里親活動に励んでまいりました。　20年以上前の時期には、行政側も里子に対して宗教行事の参加については容認していた話も聞きますし、かえって人間性を高めていくと賛同されたという話もあります。

しかし、近年は社会的問題も増え、子どもの権利を守ることが重要視されることから、さまざまな取り決めや申し合わせ事項が増えてきました。「**宗教の強要**」の問題も、その一つです。そういったこともふまえながら、今後はこれまで以上に各教区や地域においてもお道の里親同士が連携し、助け合って里親活動をしていくことが望まれていると思います。私たちが「宗教の強要」をしていないと思っても、里子が「宗教の強要」をされたと感じて訴えたならば、それは「宗教の強要」になってしまいかねないというのが昨今の現状です。以前と同じように里子と接していても、一昔前なら何の問題もなかったことが、今の時代にあっては「不適切である」「信仰の自由が守られていない」と指摘されることもあるということはご理解いただいていると思います。信仰家庭で共に生活する中で、この「宗教の強要」問題については、特に気をつけなければならない課題であることは、皆様も感じていることと思います。／　このような状況の中で、これまで以上に、児童相談所や里親支援機関など、さまざまな関係機関と一層綿密に連絡を取り合うことも大切であることは言うまでもありません。

お道の里親活動の原点は、里子が「安全・安心・温かい家庭」で生活することによって、「里親さんの家に来てよかった、里父・里母、家族は素晴らしい、温かい、親身になってくれる、心がたすかった」と里子が心から思ってもらえるように、日々の生活を共にすることであります。そして、私たちお道の里親は、陽気ぐらしを目指しておたすけとの思いでつとめているということは、皆様方と思いを一つにしているところです。／　天理教里親連盟としては、この度の案件を私たちお道の里親が里子一人ひとりへの接し方や対応を今一度見直す機会であり、**「宗教の強要」「信仰の自由」を考えていく大切な契機**であると捉えて、そのような中、どのようにして陽気ぐらしに向かって歩むことができるのか、今後ともお互いに尚一層の研鑽を深め、継続的に研修会等を開催していきたいと考えています。これまで以上にお道の里親が一手一つに、大きなたすけである里親活動を、教祖にお喜びいただき、ご安心いただけるよう、つとめていきたいと考えております。／　何卒、皆様方には、お道の里親活動の上に、尚一層のご理解とご協力をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。　敬具

現代の因縁論　ー　統一教会も信者獲得の方法として利用

下の文は、1980年代頃の立正佼成会信者の因縁観が書かれています。内容は天理教のそれと同じようなものです。天理教の因縁観は他の新興宗教と同じものであって、独自性といったものはないのです。
またこの因縁観は人生に悩んでいる人を誘い込むには効果的なようで、統一教会も信者獲得に当たって「先祖の因縁話を持ち出し、相手を巧みに誘い込む」方法をとっています。
天理教はもうそろそろ、教祖が教えられた「いんねん」観に戻さねばならないでしょう。

庶民の生活の中では、仏教のことばが呪いや悪口の中でさかんに用いられ、仏教的なものを表すことばが否定的な意味で用いられることが少なくない。現代に仏教を再生させようというその教団でも、その点は同じであった。先祖と自分の繋がりは「因縁」ということばで表されるが、因縁はそれを切り、断滅することによって救われるというように、それから遠ざかることが必要なものとして説かれる。悩みや苦しみから救われるためには、他者を責めることなく何ごとも自分に原因がないかと反省し、自分にまつわる因縁をよく見つめ深く認識することが大切であるという。しかし、際限なく広がって行く因縁の糸は無数で複雑に縺(※もつ)れあっていて、自分をあらしめている因縁の束を解きほぐして行くことは不可能に近い。
もともとなにかの問題を抱えて信仰の集まりに入って来た人々であるから、教団の中での話題は、それぞれの悩みや苦しみが何によって生じているのかという点に集中する。当然、人間に幸福をもたらしている善因縁が詮索されることは稀で、因縁といえば不幸にかかわることのみが考えられることになる。切ろうとして修行を続け、切っても切っても切りきれない悪因縁は、不断の反省によってその芽を見つけて摘みとらなければならない否定の対象であり、あの人は「因縁顔」をしているといえば生気のない暗い顔をいい、正しい生活をしていない人は「因縁丸出し」の生きざまで、「因縁どおり」の道を辿っているというようにいわれる。因縁のままに生きているということは、正しい努力をしていないのと同じであり、本来不完全な存在である人間、つまり先祖たちの因縁をすべて因果として背負っている人間として悩み苦しむことなのである。そこで、正しい信仰に導かれて悩みや苦しみをのりこえて暮らしている人は、「因縁解決」の人とよばれるのである。因縁は、断滅し切り捨てるものであり、それがなにかの作用をおこそうとすれば芽のうちに摘みとることによって、解決されるものなのであった。（「総論―因果と輪廻をめぐる日本人の宗教意識」大隅和雄.『因果と輪廻』1986.春秋社P8）

統一教会の「先祖の因縁話」

統一教会の潤沢な資金源・霊感商法

副島の告発はこれにとどまらない。／　統一教会の潤沢な資金の源泉について、こう記している。

「これらアメリカの各施設、韓国の企業群、南米、アフリカの開拓教会などの設立や維持資金は、日本統一教会員がカンパや募金、人蓼茶、印鑑、ツボ、多宝塔などの販売、しかも詐欺まがいの高額販売や巧妙な脱税によってつくり出されたものだという事実である」

さらに、印鑑、壷、多宝塔などの原価率と小売倍率、各卸売段階での卸値と利益の一覧表を公開し、「原価11,300円の印鑑が数十倍の120万円、1万円の人蓼エキスが8倍の8万円、ツボに至っては5,000円のものが実に400倍の200万円、10万円の多宝塔が500倍の5,000万円で売られているということになる。何という暴利だろう」と断じた。

統一教会によるこうした詐欺まがいの物品販売が、通常なら成り立たないのは明らかだ。それを可能にしたのが、「霊感商法」である。副島は教団内部で「ヨハネトーク」と呼ばれるセールストークの手引書についても言及、霊能者役や先生役を演じる信者（教団では「トーカー」と呼ぶ）を使って**先祖の因縁話を持ち出し、相手を巧みに誘い込む**手法を明らかにした。

－中略－

第二の特徴は、手口に若干の変化が見られることである。／　浅岡弁護士は、「まず宗教的人間関係を形成した上で販売を実行していること、さらに弥勒仏など新たな商品も加わり多様さが見られる」と指摘している。

霊感商法の手口の変化は次のようなものだ。

Ｉ　印鑑、表札、化粧品などの販売員が、戸別訪問でやってくる。手相占いなどの場合もある。

２　友人や親戚などのつてで、宝石、毛皮、着物、絵㈱、カーペット、羽毛布団などの展示会へ誘い、主としてクレジットで物品を購入させる。

３　こうしてできた人間関係を利用し、霊界や宗教、モラル低下などの話をし、ビデオセンターに誘いだす。

４　販売員のホームパーティやサークル活動に誘うこともある。

５　その上で霊石愛好会の「道場」に誘う。ここでは、「霊能師」が長時間にわたる強引な説得で念珠、弥勒仏などを購入させる。祈禱料、献金を強いることも多い。

「ビデオセンター」とは、統一教会が勧誘の入口として誘い込む施設で、自己啓発セミナーのような講義ビデオを見せ、霊界の存在や**先祖の因縁などを信じ込ませる**。ビデオセンターでの被害については、教団の使用者責任を認める判決が何件も出ている。

（『誰も書かなかった統一教会』P174. 有田芳生. 2024. 集英社新書）

「おふでさき」の「にほん」とは何か

55～61は、57～59の「からとにほんをわける」話を中に挟んで、「いんねん」でまとめています。ここでは57～59の「からとにほんをわける」の解釈に焦点を合わせてみましょう。一応【註釈】がどのような解釈をしているかを確認するために昭和3，12、現行版を提示してみました。

55．にんけんをはじめだしたるやしきなり　そのいんねんであまくだりたで
56．このさきハせかいぢううを一れつに　たすけしゆごふをみなをしゑるで
57．だん／＼とよろづたすけをみなをしへ　からとにほんをわけるばかりや
58．にち／＼にからとにほんをわけるみち　神のせきこみこれが一ぢよ
59．このみちをはやくわけたる事ならば　あとのよろづハ神のまゝなり
60．けふの日ハなにかめづらしはじめだし　よろづいんねんみなついてくる
61．いんねんもをふくの人であるからに　とこにへだてハあるとをもうな

昭和3，12年版では「から」「にほん」を具体的な「日本」「外国」として解釈しています。これは日本が戦前、海外進出を目指していた当時の状況を反映したものでしょう。戦後はこれを「親神の教を知ると知らぬの順序」としましたが、これでは具体的な内容が見えてきません。「にほん」は「おふでさき」に44例あり、「にほん－から」と対になっているものが21例あります。「おふでさき」を解釈するには、非常に重要な言葉といえるでしょう。

【昭和3年版註釈】
57.色々とよろづたすけの理をとき聴かせ、そして日本の根の国たる所以と外国の枝先である**因縁**を明らかにして、本末の順序を立てるのが親神の望みである。／　58．日日に親神の心のせき込みは、根の国と枝先の国との因縁を明らかにすることである。
59．根と枝との本末順序の道を明らかにする事が出来たならば、其の後は万事親神の思惑通りになる。

【昭和12年版註釈】
57.種々とよろづたすけの理をとき聴かせ、そして日本の根の国たる所以と外国の枝先である**所以**を明らかにして、本末の順序を立てるのが親神の望みである。／58．日々に親神の心のせき込みは、根の国と枝先の国との順序を明らかにすることである。
59．根と枝とを明らかにする事が出来たならば、その後は万事親神の心通り守護する。

【現行版註釈】
五七、五八、次々によろづたすけのつとめを教え、理を説き聴かせて、親神の教を知ると知らぬの順序を明らかにする。日々親神の急き込んでいる事は、この事ばかりである。／　**註　第二号四七註参照。**
五九、この順序の道さえ早く明らかにする事が出来たならば、その後は万事親神が自由自在に守護する。

「二号47. とふじんとにほんのものとハけるのハ　火と水とをいれてハけるで」註釈

現行版の57，58に「註　第二号四七註参照」とあるのでこれを確認しておきましょう。この註には「にほん」「から、とふじん」についての説明がされています。これを昭和3，12年版のものと比べてみると、内容的に戦前版を引きずっている気がします。この註から離れないと「おふでさき」の「から」「にほん」の解釈は出来ないと思われます。「火と水」は二号40註に「親神様の御守護」とあります。

【現行版註釈】（二号47. とふじんとにほんのものとハけるのハ　火と水とをいれてハけるで）
四七、未だ親神の教を知らない者と、親神の真意を悟った者とを分けるのは、親神の絶大な力を現してすることである。
註　にほんとは、創造期に親神様がこの世人間をお創めになったぢばのある所、従ってこの度先ずこの教をお説き下さるところ、世界たすけの親里のあるところを言い、からとは、創造期に人間が渡って行ったところ、従ってこの度この教の次に普及さるべきところを言う。従って、にほんのものとは、最初に親神様に生み下ろされたる者、従って、この度この教を先ず聞かして頂く者、親神様の真意を悟った者を言い、とふじんとは、つづいて生み下ろされた者、従って、この度次にこの教を説き聞かして頂く者、未だ親神様の教を知らぬ者をいう。／　にほんとからに関する一れんのお歌は「おふでさき」御執筆当時、科学技術を輸入するに急なあまり、文明の物質面にのみげん惑されて、文明本来の生命である人類愛共存共栄の精神を理解しようともせず、ひたすら物質主義、利己主義の人間思案に流れていた当時の人々に厳しく御警告になって、早く親神様の真意を悟りたすけ一条の精神に目ざめよ、と御激励になったお歌である。即ち、親神様のお目からごらんになると世界一列の人間は皆可愛いい子供であって、親神様の真意を知るも知らぬも、先に教を受ける者も次に教を受ける者も、その間に何の分け隔てもなく、究極に於て、一列人間を皆同様に救けたいというのが親心であるから、親神様は一列の心が澄切って一列兄弟の真実にめざめ、互い立て合い扶け合いの心を定めて朗らかに和やかに陽気ぐらしをする日を、一日も早くとお急き込み下されている。（第十号55、56註、第十二号7詮参照。火と水については本号40註参照）》

【昭和3年版註釈】外来思想と日本固有の建国の精神とを判然区別するに当っては、神はその実現に力を致すのである。
【昭和12年版註釈】外来思想に迷うて居る者と、日本精神の者とを何うして分けるかと言うと、それは親神の絶大なる力によって分けるのである。

二号40. 註　火と水は、「火と水とは一の神」と教えられているように、親神様の御守護を意味し、又、特に親神様の絶大なお力を現実にお現し下さるを言う。／火とは燈火も火、体温も火、火災も火である。／水とは飲用水も水、雨も水、身体の水気も水、つなみも水である。》

「とふぢん」＝吉田神祇官領

「にほん、から・とふじん」について【註釈】以外の解釈をしているのは、『・・・学習する』がほぼ唯一と思われます。そこでは、31は「具体的な地域、国を思い浮かべての解釈は成り立たない」と注意され、「『とふぢん』＝吉田神祇官領」を提示しています。では「から、とふじん」に対応する「にほん」とは何かが次に問題になります。

第二号31～34で、

これからハからとにほんのはなしする　なにをゆうともハかりあるまい　二　31
とふぢんがにほんのぢいゝ入こんで　まゝにするのが神のりいふく　二　32
たん／＼とにほんたすけるもよふだて　とふじん神のまゝにするなり　二　33
このさきハからとにほんをハけるてな　これハかりたらせかいをさまる　二　34

と記される。からとにほんについては、二号47の「註釈」に詳しいので、再説しないが、ただ「なにをゆうともハかりあるまい」と仰せになるだけに、その概念規定についてはは注意を要する。／　それは地理的、政治的な地域を示す概念ではない。つまり日本、唐というような具体的な地域、国を思い浮かべての解釈は成り立たない、ということである。そのようなごく常識的な考えでいれば、親神の言っている話が何のことか、さっぱり分からなくなるぞ、とまず注意を促された。／　からとにほんについての最初の話題は、次の32である。この「とふぢんがにほんのぢいゝ入こんで」というのは、どういう事態なのであろうか。

「とふぢん」とは、いまだこの道の教えを知らない者の意であるが、その者がにほんの「ぢい」（地）―ぢばのある所、最初に教えが説かれるべき所、に入りこんで、我が欲しいままに振る舞っている。これが神の立腹するところである、といわれた。このことは僧侶や医者、山伏たちのお屋敷への乱暴、干渉、迫害の出来事を思い出させる。が、時代的な背景からいえば、明治二（1869）年という時期は、一部村人からの妨害はあったとしても、比較的おだやかな時ではなかったか。それというのも、慶応三（1867）年七月に、吉田神祇官領の公認を得ていたからである（吉田神祇官領の廃止は明治三年）。

とするならば、実は、この公認を得ているということ、そのこと自体が、「とふぢんがにほんのぢいゝ入こんでまゝにする」ということになりはしないだろうか。

法治国家であるかぎり、法に従い、法の範囲内での活動しか許されないのは、人間社会からいえば、ごく当然のこととされる。ただ問題は、ない人間ない世界を創造し、いまも守護している親神の教えが、吉田神道に属する形になっていることである。何も知らない「とふぢん」が「にほんのぢい」に入りこんで、支配している姿である。それではどうにもならないのであって、親神がとふぢんをままにするところにこそ、たすけの模様立てがすすめられる。（『おふでさきを学習する』P125. 安井幹夫. 2016. 私刊本. 〈初出『みちのとも』2001. 08〉）

吉田神祇管領が果たした役割　⇒　各地の神様を格付けし天皇を中心とした記紀神話の体系に組み込んだ

2019.09P12．2023.05P30

江戸時代、吉田神祇管領が発給する裁許状によって日本中の神社、神職が「天皇を中心とした記紀神話の体系に組み込まれていった」わけで、秀司名義の裁許状を正式にとるということは、記紀神話の体系のなかに「ぢば」も取り込まれることを意味したのです。

天皇陛下は天照大神様の御子孫で、この世の始めより日本の主におわします。皆の地域にも正一位の位を持った神様がいらっしゃるであろう。実はこれはすべて、天皇陛下から御許しになられたものなのだ。だから天皇陛下は、皆の地域の神様より尊い御方なのである。

これは、明治二（一八六九）年、東北地方に出された告諭の冒頭部分だ。東北地方といえば、京都から遠く離れている上に、幕末・維新の激動期には“奥羽越列藩同盟”を結成して、最後まで天皇を戴く西南雄藩に対抗した大名たちの旧領地だ。そんな地域に天皇の存在を思い知らせるために、明治新政府が最初に切ったカードが、神様の正一位の位だった。地元の神様に位を与えた方こそが天皇陛下なのだ。つまり天皇とは、普段は意識することはないが、京都という遠いところにおわします、地元の神様よりエライ存在なのだ、という。なるほどわかりやすい。

そこで考えてみよう。江戸時代に諸国の神様に位を与えたのが誰だったかを。天皇が直接与える場合は、非常に高額で、なかなか一般の村が手を出せるものではなかった。むしろ、十八世紀の半ばに意義を失うまで、比較的低廉な価格で神様に位を与えていたのは“神使い”吉田家だった。吉田家による、地元の神社への多数の宗源宣旨の発給がなかったなら、この告諭は意味をなさなかったはずだ。美しい錦の箱に入った宗源宣旨は、下北半島の先端部にある神社にまで行き渡り、今でも大切に保管されている。

諸社禰宜神主法度の発布に伴う、諸国神職への神道裁許状の発給も見逃しがたい。これによって、諸国の多くの神職が、吉田家、つまり朝廷の公家と直接につながることになったのである。そして、その後に続く白川家との門人争奪戦は、専門の神職だけでなく、神社や神様に関わる人のほとんどを朝廷につなげてしまうところに帰結した。周く神社・神道に関わる人々が、古田家・白川家という公家を通して、朝廷、ひいては天皇という権威につながっていったということだ。“神使い”吉田家の活動は、神社を通じて、各地にそのような遺産を残し、明治の国家形成を円滑ならしめることに一役買っていたのである。

それまでは、御神体や祭神が何かわからない神社もたくさんあった。だが、それらは吉田家とつながることで、天皇を中心とした記紀神話の体系に組み込まれていったことも付け加えておこう。

江戸時代の人たちは、天皇を意識することはほとんどなかっただろうが、そこにつながるための端末は、江戸時代の神社を通じて確実に各地に埋め込まれていた。そして明治維新によって、電源が入り、端末が作動した。近代日本において、神社が地元と天皇をつなぐために少なからぬ役割を果たしたことは言うまでもないが、そのようなことを可能にしたのは、ひとえに“神使い”の活動に負うところが大きい。（『吉田神道の四百年』P202～204. 井上智勝. 2013. 講談社）

国家神道への道－吉田神道の変質

教祖伝に登場する吉田神道も国家神道成立に重要な役割を果たしたことが書かれています。

吉田神道批判　これより先、尾張国名古屋東照宮の神主吉見幸和は、神職の本所吉田家との対立を契機として、**吉田神道にたいする厳しい批判を展開した**。／　吉見がそこで用いた方法は、確実な歴史史料を踏まえ考証をおこなうというもので、一般に国史官牒主義と呼ばれている。こうした研究方法が登場した背景には、右に見たような儒学界の古学的傾向や契沖の古典研究などの影響があったと推察され、この時期に共通して認められるひとつの大きな特徴であった。／　吉田神道に対する、本桁的な批判は伊勢外宮の神官度会延佳によって着手され、**吉田家が出自を偽り、経歴を飾っている**ことを、国史官牒を駆使し実証的に暴露した。吉見は、これを敷衍しながら、さらに発展させた。／　吉見をはじめ、彼と親交のあった尾張藩士天野信景(きだかげ)など、この当時の「神道」学者たちが共通して明らかにした吉田神道批判の主な論点は以下のとおり。

⑴吉田神道の理論的骨格をなす「神道」論そのものが疑問　／　**⑵吉田家の神職の本所としての活動根拠に問題がある**

吉田家では、かねてより兼倶の称えた唯一神道論を神代直伝・唯一無二と主張してきたが、実際には、その行法を含め、いずれも仏教や道教などからの借用で、真正のものとは認めがたいとされた。また、吉田家による官位執奏や神祇官を代表するかたちでおこなわれてきた種々の活動が厳しく糾弾された。／　とくに⑵は、当時の公家社会における復古主義的な動向や天皇権威の浮上とも連動する問題で、吉田家はこれらの批判を機に多くの既得権を剥奪されることとなった。18世紀中ごろに、新たに神職の本所として神祇伯白川家が登場してくるのも、その流れのなかにあった［井上智勝　2007］。／　ただし、さきにも指摘したように、だからといって幕府によって公認された吉田家の神職の本所としての圧倒的な地位が否定されたわけではなく、幕末期にいたるまでその体制は基本的に維持された。

深刻な変質　むしろ重要なのは、この**吉田家批判の過程を通じて、吉田神道そのものが大きく変質していった**ことにこそあるといえよう。厳しい批判にさらされた吉田家は、吉見らの主張を受け容れて**「我国天照大神の道を神道といへる」**（「神業類要」、『神道大系』論説編）というように、「神道」そのものについての解釈を転換させたのである［同右］。

兼倶以来、吉田家では神祇祭祀を主体とする「神祇道」を「神道」だと主張してきた。それを「天照大神の道」と読みかえることとなったわけで、それは宣長などの主張と本質的に異なるところがなかった。これは、神祇信仰や神社祭祀をそれ自体に即して理論体系化する道が封殺され、天皇あるいは天皇中心主義的なかたちでその理論的整備が図られる方向を決定的なものにしたという点で、歴史的にもきわめて重要、かつ深刻な意味をもつものであったといわなければならない。／　吉見幸和が、

> **神道は、天皇の行ひ給ふ祭政を、百官の輩命を奉りて勤るのみ。仍(よっ)て臣下として神道を行ふと云べからず。(中略)俗学の輩、神を祭のみを神道と心得るはあやまり也。祭政の二つともに神道ゆへ、神職の者も文武の宮人も、共に官職位階を給りて、天皇の道を守り、是を勤仕す。**（「恭軒先生初会記」、日本思想大系『近世神道論・前期国学』）

と述べているのは、このことと密接にかかわる。つまり、神社祭祀そのものも天皇統治権の一部と理解されるにいたっていることを、それは示している。吉田兼倶によって切り開かれた、神社祭祀・神祇信仰を一個の自立した宗教として構築するという方向性は、この点でもその道を封殺されることとなったのである。（『「神道」の虚像と実像』P154. 井上寛司. 講談社現代新書. 2011）

「にほん」＝古神道＝記紀神話ができる以前の神道

神道（神社）とは何か？

「から、とふじん」が吉田神道、明治からの国家神道とすれば、それに対峙して使われている「にほん」も神道に関連したものと考えられます。一般に神社には拝殿があって、その奥に本殿（神殿）があります。この形式になったのは、7世紀末からで、それ以前は磐座（いわくら）などの依代（神が降臨する場）があるのみでした。この変化の原因は、仏教寺院が造られるようになったことにあります。「神道」という言葉も仏教との対比から生じたことが「日本書紀」の用例から知られます。

福山敏男（神社建築史）による区分け

（a）神離（ひもろぎ一臨時の神の座とされる榊などの常緑樹）・磐境（神を迎え、祭るために岩石などを用いて設けられた祭場施設）

（b）神殿のない神社

（c）仮設の神殿

（d）常設の神殿

※磐境は、磐座の周りを垣のように囲んでいるもの。

（『「神道」の虚像と実像』22頁）

神社とはなんなのか。そのもっとも重要な特徴は、福山が（d）として指摘したように、常設の神殿をもつ宗教施設だということにある。常時そこに神（祭神）が鎮座するものとして、これを信仰の対象として種々の祭礼や儀礼を執りおこなう。こうした恒常的な神殿をもつ宗教施設、それこそが神社にほかならないのである。／　神社をこのように捉えなおしてみると、そこにはいくつかの重要な問題が含まれていることがわかる。

神社とは、信仰形態という点でそれ以前と大きく異なるもので、そこに大きな質的な変化が認められる。神社成立以前の、福山のいう（a）～（b）では、神が聖霊であるなど、人間の目には見えないものとされ、したがって祭礼の度ごとに神を招き降ろし、榊・岩石や人などの依代に憑依させることが不可欠とされた。これは、原始社会以来の伝統にもとづくアニミズム（自然信仰）特有のカミ観念を前提とする信仰形態ということができる。これにたいし、神社成立後にあっては、祭神が常時本殿に鎮座するものとされ、この固定化された祭神そのものが信仰の対象とされる。これは、本尊を祭ってそれを信仰の対象とする寺院と、その形式において本質的に異なるところがない。

（『「神道」の虚像と実像』24頁. 井上寛司. 2011. 講談社【現代新書】）

日本における神道という語の初見は、養老四年（七二〇）に成立した『日本書紀』用明天皇（在位583～587）即位前紀の、天皇は「仏法を信けたまひ、神道を尊びたまふ」と、孝徳天皇（在位645～54）即位前紀の、天皇は「仏法を尊び、神道を軽りたまふ」である。二例とも仏法に対比して神道を用いている。これらの用例から神道が仏教をかなり意識していたことがわかる。

（『図説　神道』46頁. 三橋健. 2013. 河出書房新社）

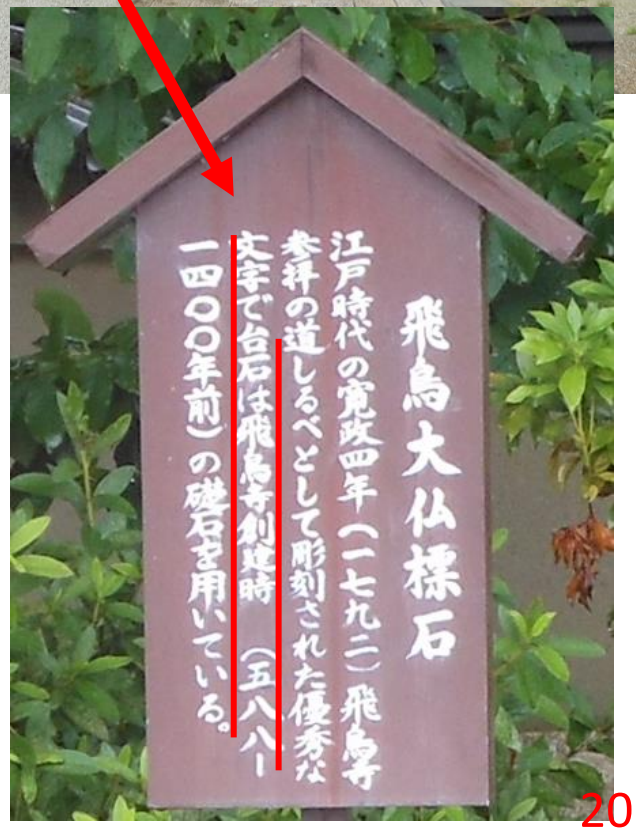
神社の本殿より寺院の本堂の方が古い

2017.03P5

681年頃「本殿を持つ神社が日本全国に広められた」以前に、日本最古の寺院とされる法興寺（飛鳥寺）は6世紀末から7世紀初頭にかけて造営されています。神社の本殿より、寺院の本堂の方が古いのです。寺院の様式を神社がまねたと考えられます。

日本最古の本格的寺院―『日本書紀』によると、法興寺（飛鳥寺）は用明天皇2年（587年）に蘇我馬子が建立を発願したものである。

奈良県明日香村飛鳥寺



神社は、681年頃から造られるようになった

≪『日本書紀』天武10（681）年（天武天皇在位672～686）に、「畿内及び諸国に詔（天皇の命令を下）して、天社、地社の神の宮を修理させた」と記されている。当時は新たに建物を建設することを、修理と表記していた。この記事から天武天皇のもとで、天神（あまつかみ）、国神（くにつかみ）を祭る常設の本殿を持つ神社が日本全国に広められたことがわかる。≫（『神道―日本が誇る「仕組み」』武光誠. 朝日新書. 87頁）

「拝殿ー本殿」様式以前の神社　大神神社のご神体は山であり、神が降りる場は磐座である

大神神社

神社が現在のような拝殿ー本殿という建築様式を持つ前は、どのような形で存在したのでしょうか。その形を現在に伝えているのが、大神神社です。同神社は三輪山を御神体とするので、拝殿はあっても本殿はありません。その替わりに磐座という神が降臨する場があります。このような磐座は日本各地の神社に見られます。

大神神社HPより

国重要文化財。寛文4年(1664)徳川家綱公により再建。当神社は三輪山をご神体とするために本殿がなく、拝殿を通して三輪山を拝む原初の神まつりの姿を留める。

磐座は各地の神社にみられる。

阿智神社の磐座（岡山）
倉敷市本町所在の阿智神社の境内には磐座や磐境が散在する。写真は拝殿に向かって左側に位置する鶴石と呼ばれる磐座である。

2017.03P6

磐座（いわくら）（大神神社）

2022.06P2

よく知られているように奈良の大神神社には本殿がない。三輪山を望む拝殿があるのみで、玉垣に囲まれた山自体が御神体とされる。誤解のないように言っておくが、山そのものが神なのではない。山全体が聖域であり、神はこの山を棲み処とされているという意味である。／　神が降臨される際、この山のどこかに降りられる、そういう場なのだ。三輪山には今も、奥つ磐座（いわくら）、中つ磐座、辺つ磐座と呼ばれる古岩がある。これら磐座とは、神の第一の依り代である。降臨された際、まず依られるものである。【萬遜樹HPより一部削除】

磐座の原形ー斎場（せいふぁー）御嶽ー

岩の間にできた三角形の空間の突き当たり部分は、拝所となっています。そこから東側、海の彼方に久高島を望むことができます。

岩の間を抜けた部分が三（山）庫理（さんぐーい）と呼ばれる

久高島は海の彼方の異界ニライカナイにつながる聖地であり、穀物がニライカナイからもたらされたといわれている。

2017.03P9

2022.06P1

古代の朝廷がどのように祭りを形成していったか。その祭りが、現在、天皇と皇室が行う祭りにどの程度、引き継がれているのか。こういう問題もある。明治期につくられたものがかなりあり、大嘗祭が行われていなかった時期もあった。伊勢神宮の神嘗祭、宮廷の新嘗祭など基本的な祭事が成立してきたプロセスが問題になろう。皇室の祭祀が伊勢神宮と結びついているわけだが、さらにそれらのもとになったものは、むしろ大神神社や宗像大社の信仰形態からみえてくる。これらは関連しながらも独立性を保っているが、重要なのは**「社殿がない神祇祭祀」**という点である。それが縄文的とか、沖縄の祭祀に近いといわれるものだ。沖縄の御嶽のような聖域と対比できる。

沖縄の御嶽は、森や洞窟や大きな岩などが祀りの場となったもので、女性しか入れないのが原型だ。昔は死者もそこへ葬っていたと思われる。沖縄の本島にある**斎場（せいふぁー）御嶽**は神々に祈りを捧げる場だが、そこから神の島である久高島がみえる。最初に沖縄をつくったアマミキヨ（とシネリキヨ）が、海の彼方の**ニライカナイ**に降りてきたのが久高島とされる。斎場御嶽は今はかなり観光地化されているが、もとはもっとシンプルな自然の聖地だった。琉球王朝の祭祀は、こうしたいくつもある地域の聖地の上位に形成されていったと想定されている。（『教養としての神道』P34. 島薗進. 東洋経済新報社. 2022）

山(三)庫理(さんこり、さんぐーい)

右の説明は、沖縄観光ツアー.comにある観光旅行者向けのものです。ここがなぜパワースポットになっているのかが分かるようになっています。
右下のは、民俗学者である吉野裕子氏の説明です。三角形と蒲葵がポイントになります。

三庫理（さんぐーい）
世界遺産の斎場御嶽の奥に三庫理（さんぐーい）があり、そこに「チョウノハナ」という拝所があります。いまは、ここから聖地・久高島を望むことができますが、もとは岩壁に囲まれていたらしいのです。三角形の岩（三庫理）を通ってきたら、絶壁の下に空間があります。そこに真上から太陽が入ってくると想像してみましょう。なんて、神秘的でしょうか？／世界遺産の斎場御嶽の奥の三庫理は、最大のパワースポットなのです。／三角形の岩（三庫理）の奥の岩が、「チョウノハナ」という拝所のチョウノハナです。岩のてっぺんに、かつて、**クバの木があり、そこから神が降りてきた**と言われてます。／斎場御嶽の奥の三庫理へ訪れると、琉球の創世神であるアマミキヨが降臨した場所に、私達は、立つことができるのです！(沖縄観光ツアー.comより)

蒲葵

御嶽の一番奥は大岩が三角形をなして割れている。そこを通り抜けると神聖な空地、山庫理(さんこり)である。山庫理は山のなかの部屋を意味すると先生はいわれる。ここに入ると右手、岩によせて「蒲葵(くば)の下大神」を祀る香炉がおいてある。**戦前には岩山の上に大きな蒲葵があった**そうである。三角に大きく割れた岩をくぐったところに丸く岩や石でかこまれたこの神聖な空地こそ一体何を象徴しているのか、そこには昔は蒲葵の樹があったが、今は神名となって残るだけ、木の根元だったところに香炉がおかれている。／　私はこの山庫理とよばれる斎場御嶽のなかでももっとも神聖とされている空地をみているうちに漠然と「ハテ」と首をかしげたが、その「ハテな」と思ったことがある形をとって「そうだ、それにちがいない」という確信になったのは先島に渡ってからである。宮古、石垣島などで古風をのこしている御嶽をみているうちに、その推定は確信となった。／　それは**御嶽のつくりは結局女人のそれを象っている、ということ**であった。(『扇』P34. 吉野裕子. 人文書院. 1984)

ビロウ（蒲葵、枇榔、檳榔、学名：Livistona chinensis）は、ヤシ科の常緑高木。別名はホキ（蒲葵の音）、**クバ**（沖縄県）など。古名はアヂマサ。中国名は、扇葉蒲葵（別名：蒲葵）[1]。　（ウィキペディアより）

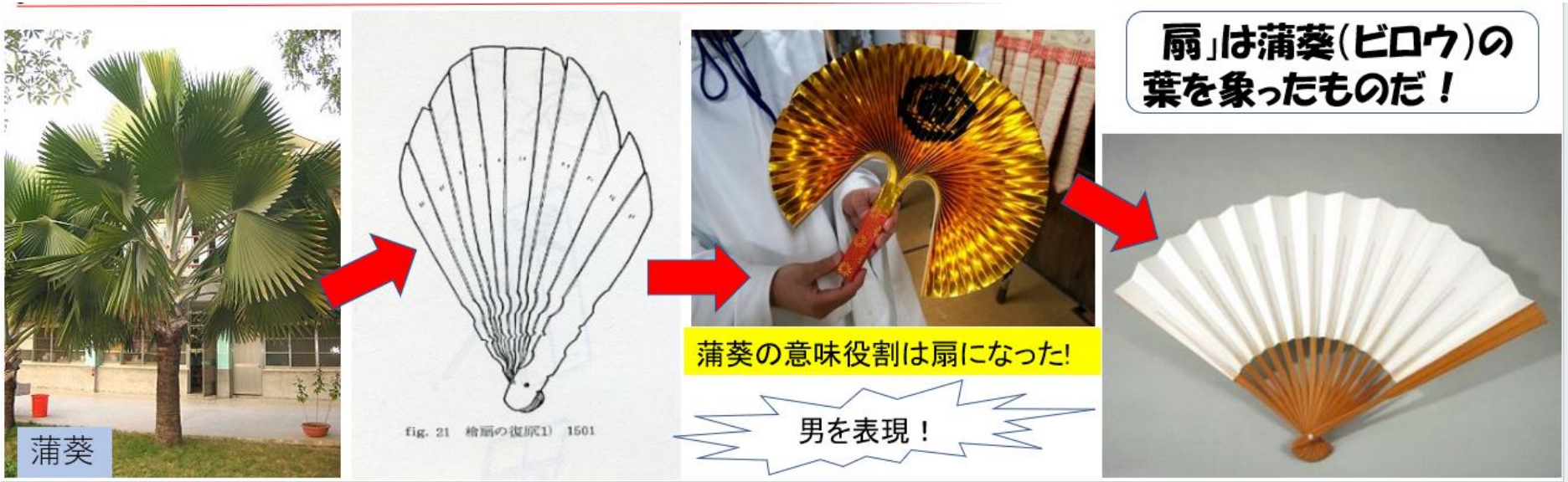
御嶽は人間生誕のようすの類推による神顕現の場

吉野氏は山庫理の構造から、御嶽とは人間生誕のようすの類推による神顕現の場だと推定します。そして男性の象徴たる蒲葵はその葉の形状から神事に多用される扇に変化していきます。そして女性を象徴する三角形の部分はミテグラになります。

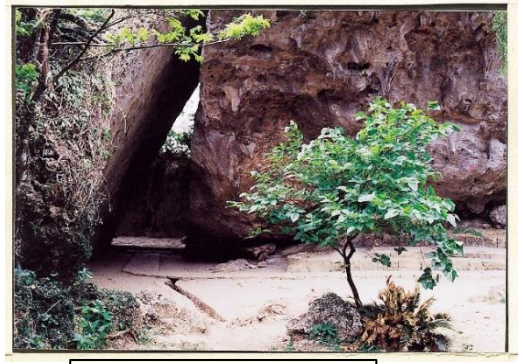
連想好きな私どもの祖先は人間の死を人間の生誕とは逆の方向からとらえて、死者を母の胎に象どったところに帰した。その墓が御嶽の起源と考えられるから御嶽のつくりはとうぜん女陰を象ったものとなろう。／　しかし御嶽は神となった祖先を再びこの世に迎える場所である。それは換言すれば神の「み生(あ)れ」の場所である。連想好きな**私どもの祖先は神の顕現の把握もまた人間の生誕のようすからの類推によった**のである。／　人間の生誕は女だけでは起りえない。もし御嶽の形が女陰を象るものならばそこにはかならず男性を象るものがなければならないだろう。御嶽における男性の象徴がほかならぬ蒲葵だと思われる。御嶽の女性のそれを象った空地「イビ」のスケールに見合った男性の象微が蒲葵であった。

ものは二つあればかならずどちらかが一方に対して優位を占めるものである。／　「種」と「畑」とではどちらが「作物」にとって大切か。もちろんどちらともいえないが、原始の人の感覚には直接作物を育む「畑」は「種」よりも重視されるべきだと思われた。母なる大地の考え方は生物にも人間にも適用された。／　生命の種を宿す男のそれも霊力高いものとされたが、直接生命を育む女性のそれは、その霊力において男性のそれを凌いだ。／　これは明らかに女性上位の考え方である。この考え方はそのまま御嶽の構造に持ち込まれ、さらに信仰形態、組織にまで織り込まれた。(『扇』P96)

神事で使われる巨大な扇



扇を両手で持つ形は持ち運び可能な神の降臨場所＝小型の神社



女性の代用

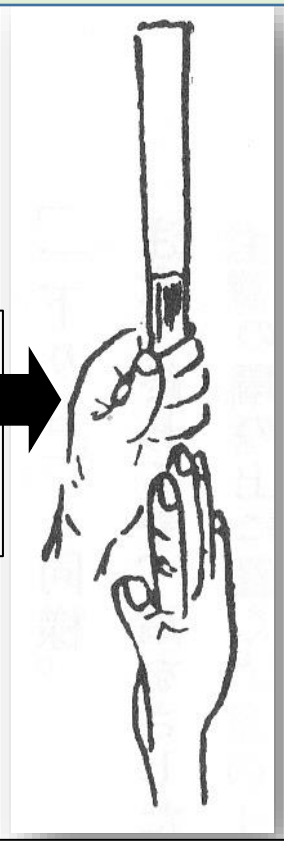
【みてぐら】語源は御手座（みてぐら）で，元来は神が宿る依代（よりしろ）として手に持つ採物（とりもの）をさした。その後幣の字を当てたため，幣帛（へいはく）と混用され，布帛，紙，金銭，器具，神饌（しんせん）など神に奉献する物の総称の意にも用いられた。
（平凡社百科事典マイペディアより）

ミテグラの意味　それは神への供物をさす場合と、両掌のくぼみ、テクラの中につきさすようにしてもたれた木の枝、扇、その他棒状のものをさす場合とがある。／　くりかえしていえば「ミテグラ」は二種類の意味をもち、貴重な神への「進献物」と、**両掌のなかに捧げられた神聖な「木の枝」をさしていう**場合があると思われる。／　ただここで注意しておきたいことは**「ミテグラ」を本来のミテグラたらしめるものは木の枝や扇だけではいけない。陰陽相合した相、つまり神聖な枝、または扇と、両掌のつくり出したくぼみがはっきり合体した相にこそ本来のミテグラがみられる**ということである。それでこそはじめて移動する神社であって、いい方をかえるならば、心のみ柱とその柱の下の関係の小型な表現がみられるのである。－中略－　／　「ミテグラ」が小型の神社、または御嶽とすれば、扇は正にその適格者である。／　つまりその**神木蒲葵に当たるものが扇で、イビ、または瑞垣の内に当たるところが、両掌のつくり出すくぼみ**だからである。（『扇』P153）

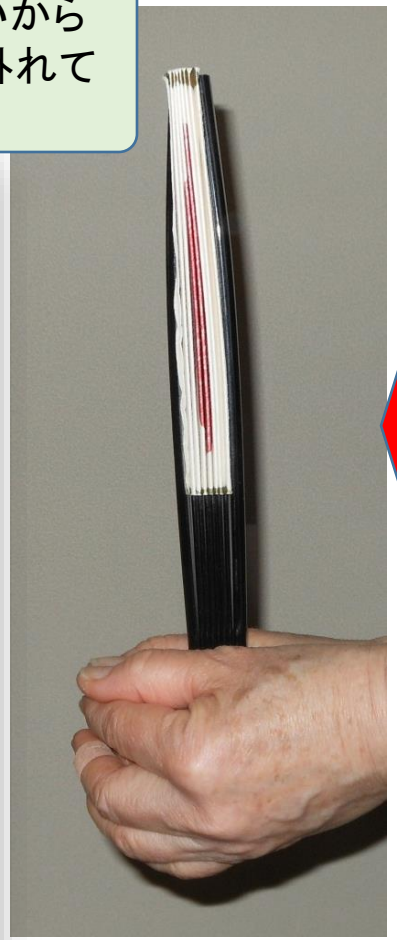
「みかぐらうた」六下り目十ド
このたびみえました
あふぎのうかゞひこれふしぎ
の扇の持ち方は、現在の天理教では、両手をずらして扇を握るようになっていますが、「ミテグラ」の意味合いから考えると、本来の持ち方からは外れて来ていると言えます。

男性の代用

現在の天理教が指導している六下り目十ド「扇の伺」の扇の持ち方



『おてふり概要』P143 1949.道友社



ここに神は顕現する＝小型の神社

2017.03P14
2022.06P7

磐座（いわくら）とミテグラ

吉野氏は、磐座、ミテグラに共通する「クラ」について、『古事記』に出て来る神の名前から、クラとはV字型を連想させ、V字は三角形に近いもので、今日でも沖縄では三角形は女性のそれをあらわすものとされているという。

「山庫理のコーリは『クラ』であって、そこは三角形の割目をもった巨石が入口を形づくっている」のであり、大神神社の依代である磐座は2つの岩からV字型がつくられているのです。

大神神社の依代、磐座

「クラ」という言葉　／　『古事記』上巻記載の神名の中に、／　㈠　天之闇戸神　アメノクラドノカミ　／　㈡　闇於加美神　クラオカミノカミ　／　㈢　闇御津羽神　クラミツハノカミ　／　㈣　闇山津見神　クラヤマツミノカミ　／といって「クラ」を冠せられた神々がある。「クラ」という言葉がこの神々には共通してつけられているのであるが、この「クラ」を取りはずして、この言葉以外にこの四神に共通すると思われるところを取りあげて考えてみると、「クラ」が何を意味する言葉なのか、判るのではなかろうか。

はじめに四神の所生と、その掌(つかさど)るところをみると、

㈠　クラドの神は、大山津見神と鹿屋野比売神、つまり山の神と野の神の間に生まれられた神で、**渓谷をつかさどる神**である。／　㈡　のクラオカミノカミと、㈢のクラミツハノカミはともに伊邪那美神の死因となった火の神、迦具土神を伊邪那岐神が斬り殺されたとき、御刀の柄に集った血が**手の股からもれ出たときに所生された神**で、**二神とも渓谷の水をつかさどる神**である。／　㈣　のクラヤマツミノカミは**殺された迦具土神の陰(ほと)から所生された神**で、谷山をつかさどる神といわれる。／　この四神に共通する点は、／　１　いずれも渓谷をつかさどる神である。／　２　四神のうち三神までが殺された迦具土(かぐつち)神の所生であって、しかも㈡と㈢は手の股、㈣は足の股間からの所生である。迦具土神自身、伊邪那美神の陰を灼いた神である。／　これらの共通点からどういう推論が導き出されるだろうか。／　**渓谷、手の股、足の股間はいずれもV字型を連想させる**ものである。／　谷は山と山がせまりあった窪みを意味し、典型的なＶ字の象徴物である。「クラ」は谷の古語ともいわれている。

－中略－　／　手の股、陰もＶ字の象徴物である。Ｖ字は三角形に近いもので、今日でも**沖縄では三角形は女性のそれをあらわす**ものとされている。／　竹富島では男の井戸は丸型、女の井戸は三角である。／　冒頭にのべた斎場御嶽の聖所、山庫理のコーリは「クラ」であって、そこは三角形の割目をもった巨石が入口を形づくっている。／　またその裏山にある、イナグナーワンダーとよばれる三角形の丘は女性の象徴といわれるが、これは本土の神奈備山の祖型ではなかろうか。この丘の西北の麓から多くの人骨が出土したことは女性の胎をとおって、生誕と反対方向に死者を送り出す呪術を示していると思う。／　要するに**三角形、あるいはV字型と女性とは古代信仰のなかで、迪想を媒介として常にからみあっている**と思われるのである。（『扇』P146）

「かんろだい」は「にほんの一のたから」

「かんろだい」は、六角の台が十三段重ねられています。六角とは日本の伝統では亀の甲を表わし、女陰を象徴し、一番下の台がそれに当たり、その上に十二段重ねられてできる柱は、男根を表現しています。まさに両手で扇を持つ形と意味そのままがはっきりと示されています。

「かんろだい」は「古代の原神道的な祭祀と信仰」(『教養としての神道』P83)の明治維新期における復元の姿と云えるでしょう。

十七号2～10

このみちハどふゆう事にをもうかな　かんろふたいのいちじよの事
このだいをどふゆう事にをもている　これハ**にほん**の一のたからや
これをばなんとをもふてみなのもの　このもとなるをたれもしろまい
このたびハこのもとなるをしんぢつに　とふぞせかいゑみなをしへたい
このもとハいさなきいとざなみの　みのうちよりのほんまんなかや
そのとこでせかいぢううのにんけんわ　みなそのぢばではじめかけたで
そのぢばハせかいーれつとこまても　これハ**にほん**のこきよなるぞや
にんけんをはじめかけたるしよこふに　かんろふたいをすゑてをくぞや
このたいがみなそろいさいしたならば　どんな事をがかなハんでなし

「かんろだい」とは、「神の顕現」の場を、神の原初の意味に基づいて明治初期に蘇らせたものである。

明治維新以降の国家神道につながる吉田神道を「から」と表現した教祖は、それに対するものとしての原初的な神道を「にほん」と言い表しました。しかし、その具体的な姿、象徴する形は存在しません。そこで、生み出されたのが「かんろだい」であり、それゆえ「にほんの一のたから」なのです。

神道の古い姿を考える際には、こうした歴史的な変容をよく見届けて、さかのぼってそれ以前の姿をとらえ返していく作業が必要になる。どこまでさかのぼるかというと、縄文峙代から弥生時代、古墳時代を経て大和朝廷が確立していく過程での地城の神々の像を復原していくところまではある程度、進んでいける。宗像・山雲・大神・稲荷・八幡・諏訪などの神々が形を整えていく**古代の原神道的な祭祀と信仰のあり方を想定**することになる。

沖縄は明治維新以後、さらには今もそうしたものを伝えているのではないかとみなされてきた。九州から東北までの日本では、そこに古代の律令神道的なもの、仏教的なものや近代の国家神道的なものが入り、古い姿がみえにくくなっている。神仏習合をくぐり抜けてまた復興している神道的なものもある。そうした動きを考える際に、稲荷信仰は非常に興味深い事例と考えられる。神仏分離を掘り下げて理解すると神道の姿がみえやすくなるといえる。(『教養としての神道』P82. 島薗進. 東洋経済新報社. 2022)

2017.03P15